

平成25年7月1日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

夏秋ピーマンのアブラムシ類、アザミウマ類対策について

本年は、5月から6月にかけて小雨・高温で経過したため、梅雨入り後の降水量は地域によって多かったものの、夏秋ピーマンではアブラムシ類、アザミウマ類の発生が多くなっています。

また、向こう1か月の気象予報によれば、気温は平年並か高い確率が40%と予想されているため、今後も多発しやすい条件が続く恐れがあります。害虫の発生に注意し、速やかな防除に努めましょう。

1 アブラムシ類対策

夏秋ピーマンでは、主にワタアブラムシとモモアカアブラムシの2種が発生し、いずれもCMVやPVYなどのウイルス病を媒介します。夏期の高温時にはワタアブラムシの発生が多くなります。なかでもワタアブラムシは、平成25年5月31日付け特殊報第2号で示したように、ネオニコチノイド系薬剤に対して感受性が低下しています。発生種の動向を見ながら、代替薬剤としてコルト顆粒水和剤、チェス顆粒水和剤および合成ピレスロイド系薬剤を使用しましょう。

2 アザミウマ類対策

夏秋ピーマンでは、ミカンキイロアザミウマとヒラズハナアザミウマの2種が発生し、両種ともトマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介する重要害虫です。平成25年6月に実施した巡回調査では、県内全域で両種アザミウマの多発生が見られました。なかでもミカンキイロアザミウマは、多くの薬剤に対して抵抗性を獲得しています。両種に対してスピノエース顆粒水和剤散布が効果的です。コテツフロアブルおよびハチハチ乳剤も高い効果が認められますが、地域によっては効果不足の事例があります。ネオニコチノイド系薬剤やアーデント水和剤の効果は、ヒラズハナアザミウマに対してのみ高い事例があります。

生物農薬ではスワルスキーカブリダニ(商品名 スワルスキー)があります。施設栽培の夏秋ピーマンでは1回の放飼で十分に定着します。ただし、ミカンキイロアザミウマには高い防除効果が有りますが、ヒラズハナアザミウマは十分に抑制できません。また、アザミウマの密度が低い時期に放飼する必要があり、使用する薬剤も限られます。

3 防除上注意すべき事項

- 1) 作物によって使用できる防除薬剤が異なるので、農薬使用基準(使用時期、使用回数等)を遵守し使用する。特に、混合剤の場合、異なる商品名で同一の薬剤成分が含まれる場合があるため、「成分総使用回数」を十分確認した上で使用する。
- 2) 薬剤によっては、高温時に薬害を生じやすいものがあるため、散布時間や天候、使用する展着剤の種類等に十分注意した上で散布を行う。